慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代ドイツ社会学の思考状況に関するノート：その人間中心主義的志向をめぐつて
Sub Title	A note on the "Speculative-Constellation" of German sociology of today
Author	石坂, 巌
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.9 (1955. 9) ,p.686(36)- 696(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19550901-0036
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550901-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノート

——その人間中心主義的志向をめぐつて——

石坂巖

「西方社會學の自然主義的、心理主義的であるに對し、ドイツ社會學の本質は精神論的であり、その方法は理解である。」Sombart, Soziologie 1923,S. 9—14.

一、「人間學的社會學會議」
二、ウェーバーとディルタイ
三、認識批判としてのイデオロギー
四、近代經濟理論と知識社會學
五、社會學的人格概念

本稿は元來第二次大戰の「恐るべき崩壞」(L. v. Wiese) 後のドイツ社會學界を精力的に主導しつつある雜誌「Kölner Zeitschrift für Soziologie」を入手し得なかつたが故にひとまず斷念された「ドイツ社會學の精神史的狀況」の研究のために讀み集められたいくつかの論文により構成されている。それ故ドイツ社會學の戰後の再建、新發足、展開の歩みを跡づけることにより、ドイツ社會學史における現代のそれの位置、意義を考察する意圖に代つて、方法、對象、課題に對する彼らの態度の特徴を窺い且つそのりんかくを描くことに限定されている。戰後日本における社會學的視向のアメリカ的傾斜、そしてドイツ社會學紹介の殆ど皆無なることを思えばかかるノートの提供も許されるであろう。

尙ここにいうドイツ社會學とはいわゆる西獨のそれであること、參考論文の本文中での引用を一々指示することは煩雜に耐えぬことと、紙面の簡約のため末尾に一括列記することにより代えられていることを附記しておく。

一、「人間學的社會學會議」

人間こそこの世の意味である (L. v. Wiese, 閉會の言葉)

現代ドイツ社會學の問題狀況を象徴するかのように一九四九年九月二十七、八日 Mainz 大學において L. v. Wiese 議長の下にこの學會は開かれた。「人間についての關連諸科學促進のための會議」という長たらしい副題をもつたこの會議の席上には人種學者が哲學者と、社會學者と神學者とが肩を並べ法學者の隣に心理學者が腰を下ろした。とりわけ經濟學者と社會學者が多かつたとはいえ、ある一部門の學者が絶對多數を占めたとはいえなかつた。出席者のこの多彩な顔ぶれにもまして會議のテーマ(1)「人格と集團」(Person und Kollektivium)、(2)「十九世紀の巨大な人口增加の社會的、文化的歸結」(Die sozialen und kulturellen Folgen der großen Bevölkerungsvermehrung des 19. Jahrhunderts.) は彼らの問題意識の具象化であつた。今このテーマをめぐつて社會學、哲學、心理學、精神病理學、經濟學、法律學、人種學、教育學、神學の九專門學問の代表者により行われた報告を詳述することはできぬが、第一に人間人格の集團的實存としての社會形成體との關連において人間の研究を各專門視角からとりあげること、第二に同樣に各專門視角からの人口增大の人間＝その能力、資質、知性＝への影響の檢討、卽ち L. v. Wiese の開會の言葉でいえば「人間なるものの認識」という綜合的課題に仕えるべきことが、とりわけドイツ社會諸科學に向けて布告されたのである。

その成果はともあれ會議が社會學者 L. v. Wiese により提唱され且つリードされたという事實は右の布告と共にドイツ社會學の積極的な意慾と關心の所在を示すものであろう。このような意慾が又社會學內部において理論的な主張として形をとることも自明であろう。Hans Winkmann は、L. v. Wiese 生誕七十五年紀念論文集中で Harriet Hoffmann が社會科學的研究方法としての L. v. Wiese の關係理論の基礎附けを行つたのに呼應して、同論文集中において體系的社會學（關係理論を指す）が自身の問題領域を確定し且つ全體的觀照を提供することにより社會生活の理論に方法的基礎を提供したことをその功績として稱え、他の社會諸科學が之により彼ら自身の思惟遂行の廣汎な深化に新な衝擊を受け、新しい認識のための路を知つたという限りで大きな影響を受けたことを主張し、經濟學、教育學、社會政策、社會倫理學、別して社會心理學、經營社會學、經營社會政策へ及ぼした關係理論の基本範疇たる「社會過程」＝態度と狀況の產物＝概念の影響、意義を夫々の分野に亙つて跡づけた。L. v. Wiese 自身ドイツ社會學會の再建に際し、Max Weber 時代の古いプログラム（價値判斷排除の要求、客觀的認識への限定）が秘敎的に把握された科學性のあまりの强調の故に純理論の獨立化を阻害したこと（例えば第一、第二回社會學大會（一九一〇年、一二年）では議論は論者が現實上、推定上抱く規範への追求にかり立てられ、個人的關心からその內容がいかほどに自由であるかその程度の測定に終始し內容の問題が置き去られたこと）、又現代ドイツ民族のもつ大きな窮迫に較べればより幸福な時代における產物であることから最早そのプログラムは「古くさく」みえ維持しがたいとし、新たなドイツ社會學會の規約第一章に「學會は理論社會學並びに社會政策を含めての應用社會學の諸問題に專心する」べき規定の明示を要求し之を決定せしめた。

以上やや外面的な諸事情の一瞥により現代ドイツ社會學の人間中心主義的志向と積極的な意慾を示したが、ではかかる「まなざし」、「意慾」が彼ら自身營む社會學の學問的活動においていかに展開されているか、若干の論點について以下このことを考察してみたい。

二、ウェーバーとディルタイ

「抽象的、實體的本質のあの灰色の亡靈が追拂われた跡に人間が殘る」……Dilthey

「行爲の背後に人間が立つ」……M. Weber

恐るべき崩壞からほぼ十年經た一九五四年十月かつてのマックス・ウェーバーの町 Heidelberg に開かれた第十二回ドイツ社會學大會並びに第三回人間學的社會學會議の席上のべられた L.v. Wiese の開會の挨拶はこうであつた。二十年前には超經驗的思辨的支配の故に事實の蒐集が强調されたが、現在ではアメリカのやり方によつて Tönnies, M. Weber, A. Weber, Sombart, Simmel, L. v. Stein, A. Schöffel による自己の傳統を忘るべきでないこと、そして自立的理念の價値を高く保持し概念的なるものを無視することなき研究者としてとどまるべきであり、集團的活動に脅やかされることなく個人的研究活動を押し進めることを强調し、何よりも何が傳統であるかを顧みることを要求したのである。然し彼が「アメリカ的やり方」の前での祖國の社會學的傳統の忘却を懸念するかなり以前に Renate Wanstrat がその論文「Die hermeneutische Methode in der soziologischen Forschung」(1949) においてその「傳統」を現代社會學的思考の基礎として確認しつつあつた。Wanstrat が確認したその傳統とは「社會の外面的組織や計畫ではなく社會的態度と行動のうちに現わされるものすべての發展と展開」とをその對象としてもち、「同時にだが又人間の生活遂行を規定し內側から作用する精神的諸動機を、その結果との關連において理解し解釋する」という視角をもつ「文化社會學」と之に固有且つ適合的な方法としての「理解＝解釋的」方法であり、「吾々は人間を眼の前においているものであること、吾々自身又人間であることを常に自覺していなければならぬ」という「態度」であつた。そしてこの傳統がとりわけディルタイ（解釋學）とマックス・ウェーバー（理解社會學）に根差すものであることを、ギリシヤ語 Hermes に由來する Hermeneutik（解釋學）が神話學的源泉に發しキリスト教、ストア哲學へ流入しそしてルネサンスのプロテスタント教會から彼等を護る「黃金の鍵」として迎えられ、ついで啓蒙の自然科學的思考に支配された後 Schleiermacher, Droysen に至つて初めてドイツ的傳統としての姿を現わしてきたその（解釋的方法の）歷史を顧みつつ位置づけた。彼は更に「Das sozialwissenschaftliche Verstehen bei Dilthey und Max Weber」(1950) なる論文において右のディルタイとマックス・ウェーバー相互の親近性を、彼等に對する自身の世代の親近感により彩りつつ詳細に跡づけた。從來マックス・ウェーバーを新カント學派と同一地平に置くのが通念であつたが近時のドイツ學界ではディルタイに近づける意見が有力になりつつある（例えばマックス・ウェーバー學問論論文集第二版の編者である Johannes Winckelmann も又同一見解を示している）。では哲學者ディルタイに反し哲學者ではなく又たろうともせず法律學者、經濟學者、社會學者として、特殊研究者として、只「專門科學」にのみ仕えんとしたマックス・ウェーバーとディルタイとのつながり、親近性はどこにあるのか。深い現實感覺、社會形成を支える精神的なるものへの姿勢、人間が己れの內部にもつ暗い衝動、

歷史を規定する非合理的契機の洞察、豐かな歷史的思考はいずれも兩者の共有するものではあつたが何ものにもまして、彼らを結びつけるのは「人間中心主義的視向であり恒に人間の人格を研究の中心點においた」ことであり、その結びつき方は「ディルタイが個々の社會科學部門にいわば遠くから示した課題と目標をウェーバーが引つぎ、自己の特殊領域について徹底的に考えぬいた」というものである。問題點に卽していえば「ディルタイ以前には文獻學的考察の領域にのみあつたようにみえる『理解の技術』をウェーバーが社會學の領域に移し、この領域に新たな道具を創造し爾來社會的現實の探求に新な可能性と路を開いた」ということであつた。

その始まりにおいて數學的自然科學的觀察樣式並びにロマン主義的思辨的思考への鬪いを起點とし、民族精神、民族心、有機體等の概念を神秘的としてその實體化を拒否し、人間的なるもの、經驗的なるものの尊重を主眼とし更に歷史學派が現實の深い感情にひたつて抽象化の世界から逃避したことを責め、他方抽象化した部分內容を生きた全體に關係づけることを無視した點に抽象派の根本誤謬を認めつつ、歷史的現實をそのものからみることを主張し續けたディルタイの課題は「かかる所與のものの地盤の上で歷史的世界の一般的妥當知識はいかにして可能か」という問題解決の爲の方法と武器を發見することであつた。その發見はあまりに幅廣い關心の故に果され得なかつたが個別的多樣性を概念的に整序するための比較的處理方式は「理解」の自己目的ではあるが、多樣性を理解しつつ且つ比較するにより諸々の作用が析出され、この作用連關の考察により規則性が明白になりそこに豫測的知識の成立が可能となる點に「理解」の論理的機能を認め、更にそこに行われる概念構成は共通なるものを個々の事例からとり出す單なる一般化ではなくしてその概念的產物は「型」を現わすものであること、そして「現象の多樣性は……そこでその仕事が完全に現實化されるという理想的な場合を形成する中心點をめぐつてまとめられる」ことを注意している。認識論、論理學、方法論の關連の下にとりあげロマン主義的恣意と不可知論的主觀性の絕えざる崩壞に對し歷史の確實性をつくり出すというこの解釋學の原理的課題が、マックス・ウェーバーにより、理想型的概念構成、評價と價値關係の又評價と價値解釋の峻別、更に價値解釋は意味ある態度決定の準備的作業という意味で價値に關係づけられ、更にそこから可能な未來の狀況從つて態度決定の測定が成立し得ること、このようにして理想型概念構成が客觀的可能性と適合的因果という論理裝置を伴いつつ人間の態度樣式（社會的行爲）の妥當な意味把握解釋に近づく手段とされつつ解決の步を進めたことはあまりにも周知であるだろう。そしてこの理想型的概念構成の概念產物は認識「手段」であり歷史の生成と共にうつろうという動態的性格の故に、「あの抽象的實體的本質者の灰色の織物はひき裂かれて人間」（ディルタイ）が吾々の認識努力の正面舞臺に登場し、且つ又觀察者たる吾々自身再びその舞臺での演技者でもあるという事によつて理解＝解釋的方法は固有且つ適合的考察樣式なのである。ディルタイ流に言えば生を生そのものから把えるのである。

ディルタイ＝マックス・ウェーバーをつなぐこのようなドイツ的「傳統」を R. Wanstrat は確認しつつ歷史的、社會的本質として人間はその全き人格性において社會科學的研究のすべての努力の

交點にあること、その相互に對する態度、絶えず變轉する諸制度、形成體、その生成、成立に共同する彼の行爲が自らの認識對象であることを改めて確立した。

三、認識批判としてのイデオロギー
——Der homo Vitalis と Der homo Intellectualis (Theodor Geiger)

すぐれて知識社會學的概念である「價値からの自由」(Wertfreiheit) はマックス・ウェーバー自身において理解社會學に結實するに至つたが、他方又「イデオロギー」概念へ高められ知識社會學の基本概念として二十年代後半から三十年代にかけてドイツ社會學界を根底から搖り動かすことになつた。そこでは人々は最早夫々の論者が抱くであろう理念追求の「狩人」たるを止め「敵か味方か」をきめつけあう戰士となつて對峙した。この「異常な鬪爭狀況」(E. Tuchtfeldt) こそ現代ドイツ社會學の直接的傳統であることは論ずるまでもない。この異常な傳統は、先にあげた戰前のドイツ社會學會創成期を支配したマックス・ウェーバー的プログラムがより幸福な時代の産物として今や「古くさくみえる」——L. v. Wiese——という現代ドイツ社會學界の精神的雰圍氣下では「汎イデオロギー主義」(Pan-ideologismus) の一面性への警戒として理論的に自省されつつある。「思惟が存在に拘束されている」というマンハイムの汎イデオロギー的命題は彼の意圖せざる結果として非合理主義に路をあけ——丁度 Pareto の「殘基」(Residuen)「派生」(Derivationen) という知識社會學的理論がイタリヤ・ファシズムに利用されたように——「異常な鬪爭狀況」が頂點に達したナチス支配の一九三三年、從來の幹部 Sombart, L. v. Wiese 等に代つて社會學會の指導的地位についた Hans Freyer において「まさに認識樣式の社會被拘束性は一定の存在局面を特に純粹に又特に深く認識するチャンスを意味する……社會的に何ものかたろうとするもののみが社會學的に何ものかをみる」(H. Freyer: Soziologie als Wirklichkeit, 1930 S. 113 u. S. 305……T. Geiger 論文より引用) として「主觀性の國民社會主義的崇拜」(Geiger) を出現せしめたが、この Freyer でさえ、今では「價値からの自由」、「理想型的概念構成」の熱心な主張者に轉じている（後記論文參照）。

さて右の理論的反省は先ず第一に敵對する攻擊の武器として手あかにまみれ色褪せてしまつた「イデオロギー」概念の歷史的、論理的反省のうちに概念內容の妥當領域確定へと向つた。M. Horkheimer の「Ideologie und Wertgebung」(1951) や Egon Tuchtfeldt の「Zur heutigen Problemstellung der Wissensoziologie」(1951) はこのようなものであるが、前者は佛大革命期の啓蒙派の Ideologen に始まりドイツのマルクス・エンゲルスの唯物論を經てドイツ社會學の「イデオロギー」概念に至るその歷史を顧みつつそれのもつ相對主義的性格、精神の感覺、本能、社會經濟條件への從屬化から、世界は世界以外に標識を必要としないというスピノザ的命題即ち明確な理念の把握と滲透する現實認識のうちに脫しようとする主意主義的性格とその故の論理的分析の未熟さの爲に、後者は同じようにこの概念の歷史的起源を考察してはいるが今すぐあとにふれる Geiger 論文に基本的に立脚するとみられるが故にここに立ちいる事を避けたいと思う。

一見自明にみえるが故に立ちいつた分析なしに使用される傾きのある「價値判斷」概念の論理講造をスウェーデンの哲學者 A. Hägerström(1939 歿) の「價値判斷發生」に關する理論に依りつつ分析した T. Geiger の論文「kritische Bemerkung zum Begriffe der Ideologie」(1949) はその明晰性、問題性において恐らく戰後におけるこの方面の論文中出色のものの一つであろう。彼の根本主張はイデオロギー概念の妥當領域を理論批判にのみ限定し理論中に混入される理論外の契機を批判・摘發する概念としての機能を與える事により汎イデオロギー主義の危險を克服しようとする點にある。そしてこの主張を推進せしめる論理的軸心は「價値判斷があらゆる眞の理論的內容なき純粹のイデオロギー」であること、及び「すべて精神活動なるものは諸々の個人のそれであるが故にそれを超個人的主體に歸屬させんとする事は無意味であり神話である」との二つのテーゼにより組立てられている。本來思考の正・不正、眞・僞、正・惡を判別する客觀的法延の存在するのは、現實認識の局面にのみ存するので、その形成が各自の生活體驗の如何に依存するような主觀的、實存的な思考面には存しない。もし後者にあるとすればそこでは「正しき階級意識からナチスの正しき種族・民族意識」に至るまでさまざまの審判者が登場するであろう。從つてそこにおいて「勞働者が惡しきイデオロギーをもつている」が如き言い方はナンセンスであろう。何となればそこではすべては正しいイデオロギーであり惡しきそれであり得ようから。然るに「企業者利潤は經濟的進歩の必須條件である」という主張を企業者イデオロギーと呼ぶなら客觀的現實についてのこの認識の現實との一致・不一致、眞・僞についてその虛僞性を爭い得るであろう。この客觀的現實の認識上の立言を彼は理論的命題と呼び虛僞的思考としてのイデオロギー概念をそこに限定し、上記の理由から汎イデオロギー主義の誤りを認識領域を越えたすべての精神活動にまでその範圍を擴大した點に認め、ここに一切の混亂の原因をみた。しかして理論局面にのみ虛僞の思考としてのイデオロギーは成立し得るが故にこの概念は認識批判の概念として機能し得る。したがつてイデオロギーの本質は「理論外の契機」が思考中にしのびこんでいる點にあるとされる。然るにすべての思考は個々の人間のそれである以上そのような契機としての社會構造の思考中への突出ということはあり得ずむしろ心的態度 (Mentalität) の問題である。さて Hägerström によれば價値表象は客體への評價する者の感情關係が空間的時間的に與えられた客體の特性中へ解釋し直され客觀化される事により生ずる。然るに空間的・時間的現實體として價値なるものは存しないが故に、それは客體への諸々の個人の感情連關にすぎないが故に、價値主張は理論的立言ではあり得ない。對象に對してはそれは眞・僞、正・不正のらち外にあり「無」である。以上の Hägerström の價値判斷發生理論から最後の點に反對しつつ自身の價値判斷構造論が展開される。例えば動物虐待について某氏が

1、嫌惡感を覺える……第一次的評價行爲
2、「ペッあの虐待者め」とはき出した場合……吐露的評價の表明
3、「私は動物虐待を嫌惡する」と言つた場合……反省的評價

4、「動物虐待は嫌惡さるものである」……價値判斷

(1)――(3)が虐待に對する彼の感情關係について即ち自身について言われているのに反し(4)は虐待自體について「嫌惡」という特性が內在するものとして置かれているのであり理論的敍述を志向しているのである。かかる感情關係の客觀化・價値判斷は理論外契機の思考への侵入＝イデオロギーとして批判を免れない。かくイデオロギーは第一次的感情關係の客觀化・理論化に依る眞ならざる、みせかけの理論として反理論的現象であり、このように感情現象に感染された理論である點にこの言葉がもつ一種の蔑視感が生ずる。最後にかかるイデオロギー化の危險を、感情禁慾と自己コントロール、自身の潛勢的なイデオロギー源泉の自省により免かれんとしている。この點ではウェーバー・マンハイム的傳統をうけついでいるがこの危險は、政治家、學者としてのマックス・ウェーバーの苦闘に象徴されているように、Der homo Vitalis(生活者)、Der homo Intellectualis(知識者)という二重容貌をもつ吾々人間に一切をひきつけそこから思考を始める時、のつぴきならぬ課題として照らし出されるものである。

四、近代經濟理論と知識社會學

「數學的編細工でなく人間の行爲、行動が問題なのだ」――G. Eisermann

以上にみたような幅廣い關心、活潑な意慾は當然思考の分野を擴大するに至る。例えばかつて第六回社會學會大會(1928)に哲學者として出席した Rothacker は、その大會での Sombart の社會科學の方法としての「理解」についての報告に對し道德的諸現象にのみ「理解的」方法は適用されることを主張して只一人この方法の普遍化に反對したが(Verhandlungen des sechsten Deutschen Soziologentages, 1929. S. 235―238.)、この彼が今「Bausteine zur Kultursoziologie」(1949)によってこの「理解」を方法としてもつ文化社會學の礎石として利用さるべき社會科學、美術、哲學、文學上の豐富な文獻を呈示しているのをみるとドイツ精神生活史の屈折に手ざわりする思いにうたれるが、ここでは社會學に最も密接に關連する經濟學との關係にふれてみたい。

現在旺盛な學問的生產力を社會學、社會哲學の分野で示しつつある Ziegenfuß は「Wirtschaftssoziologie und Wirtschaftstheorie」(1950)によって、「經濟の理論はその對象を自然科學のメカニズムのように自足的、自立的機能連關として因果的に構成しうる」という、かの宿命的誤りから經濟理論を護ることは社會學の證明を要らざる課題となしている。この「宿命的誤り」からの經濟理論の解放に H. Sultan は「Gesellschaftliche Strukturwandlungen und Nationalökonomische Theorie」(1953)なる論文において手をそめた。續いて之に刺戟を受け G. Eisermann は「Bemerkung über das Verhältnis zwischen ökonomischer Theorie und sozio-ökonomischer Struktur」(1954)を發表した。今この兩論文における問題點をまとめればこうである。

先ず Sultan がこの「解放」のプログラムを公布し、Eisermann がそのモノグラフへの路を開けた。プログラムは(1)經濟理論に「君がそのように考えるのは何故であるか」即ち經濟理論の活動樣式(Art. u. Weise)、把握樣式を、從ってその內實ではなく「理論の營み方」を設問すること、(2)それと社會構造、その轉換との關係をみること、(3)そのために Mannheim であれ M. Scheler のであれ知識社會學の諸概念を使用することとして規定された。このプログラムはすでに無意識的に適用されていた、且つ又決して特殊ドイツ的ならざる右の設問樣式を――Sombart, Eucken, Keynes, Myrdal やアメリカの制度學者達にすでにみられた――より自覺的にとりあげ、より鋭い武器(知識社會學)をそれに添えたものである。この綱領の實踐は何より現代に支配的な「近代理論」に向けられその結果「近代理論」の活動樣式のよって立つ地盤はそれ以前の社會構造に依據し、その思考樣式(Denkstil)は內容的には既に過去のものとなった思考立場(Denkstandort)に屬することが摘發されたのである。知識社會學的分析によれば「近代理論」の營み方は

(1)「模型においての思考」

(2)「理論の道具的性格」

(3)「均衡定理と彈力性概念」

に示されている。このうち(1)の「模型論」は古典派のよった標語「Laissez faire, laissez passer, le monde va de lui-même……」の後文「世界は自ずと動く」という豫定調和信仰に基づくものでありかの理神論の「見えざる手」をもつ、M. Scheler 的に言えば≫Ingenieur-und Maschinist≪(技師―機械師)の神の代りに經濟理論家が神の「座」に位置し人間の經濟と社會とを含めて世界という機械が「自ずと廻轉する」よう設計したもので、まさに初期自由主義の「亞神學的思考立場」なのである。古典派の「自然法則」概念は現代の「模型」概念としてその亞神學的立場を薄めたのでありあの見えざる手の豫定調和の理神論は自由貿易論、政治的自由主義、連帶心理、對外政策上の balance of power 等に廣汎な思考立場の構造的同一性を示したが現代ではこの同一性を「均衡定理」に出現せしめ、この定理の動態的純化たる「彈力性」概念をもつに至った。道具的性格の哲學的地盤は新カント派やプラグマティズムにあるがともあれ右のようにその思考立場、思考樣式の十八世紀中葉型であるのに、あの理神論の現實地盤たる社會構造のその後の質的變化は言うまでもないとして近代理論にその活動樣式の知識社會學的不適合性を刻印し、誰が(質的……社會的勢力)、どれほどの多數の人(量的)がある一定の理論を擔い代表するかということこそ重要であると主張して理論のもつイデオロギー性の問題を指摘した。

かかる近代理論の知識社會學的不適合性を豐富な文獻を示しつつよりラディカルに示したのが Eisermann で例えば「完全均衡」「完全競爭」という均衡定理は社會の調和――所與の社會經濟の枠內にさまざまな狀態にある社會學集團の利害の調和を前提とし、かくてその理論體系は、社會的調和の現存することの宣言に關して一定の社會學的集團のもつ利益狀況に顯著に對應するもので實踐的要求と合致しているものだと言いきつている。この「現實不適合性」は可能な限りの全體的數學化によっては調整されずしてむしろ人間の行爲、行動が問題なのだという事實を忘るべきでないこと、そして特に人間行動に密接に結びついた局面を對象とする景氣變動論、

財政學、貨幣論、金融論はもし右の事實を忘却し、各種の人間行動を與件Aとして一括してしまうなら「眞空中の理論」に墮してしまうこと、このような點では、近代理論の父達 Menger, Marshall や、その追隨者に反して Keynes は右の問題點をはつきり看取していたことを跡づけ注意している。——例えば Keynes の企業者の期待、流動性選好、消費性向等の心理的概念はもともと人間行動＝社會學的局面を表示するものであると。

經濟理論の理論的墮落、獨斷的ユートピヤからの解放の前提は「現實への姿勢模式や現實からのその構成部分の選擇」がすでに觀察する研究者の Persona（彼の知識社會學的立場を含めて）のうちにあるを承認する事だと知識社會學は敎える。何故なら「吾々は理論に對しているのではなく狀況に立ち向つている」(Sultan) のであるが故に。

五、社會學的人格概念

「產業的社會の巨大組織は人間を機能に還元し人間の生命性を卽物的效果に代える」——Hans Freyer

注意深い讀者は旣に、ドイツ社會學の現代的關心の幅廣さと活潑さの軸心として「人間——その人格」概念が人間行動、態度分析への要求を伴いつつ中央に位置していることに氣づかれたであろう。多方面な關心は社會構成體の基礎單位としての人間內面への深々とした意識と對應しているのである。その點にこそ先にあげた第一回人間學的社會學會議の第一テーマ「Person und Kollektivium」の知識社會學的意義が存する。從つてここに人格概念の社會學的意味と意義とに少しく觸れておく義務がある。この點で私達は社會學者、社會哲學者 Ziegenfuß に最も適切な規定者をみ出す。彼をして語らしめればそれは次の三條件より成る。

(1) 私達がその中にあるを義務づける社會的生活連關內で價値的に積極的だという意味で自發的に活潑に在るという態度……本質的概念

(2) それ故超個人的目的が承認されていること

(3) この目的の實現化に手助けになるときにのみ個人の行爲は社會的意味をもち之によつて業績（Leistung）という性格が形成されること

この三つのモメントにより構成される社會學的人格概念はそれ故切り離され孤立化された「個人」(Individuum) の概念と區別されるものである。從つて私達は冒頭にあげた學會で社會學部門を代表した報告者 W. E. Mühlmann が「個人と個人の集まり」(Summe) に代つて「人格と社會形成體」という概念裝置による研究對象の構成を主張した所以を十分理解出來る。

ではこのように社會的生活連關內部における積極的態度としての人格概念がかほどにまで强調され、重要な位置を有している意義を足早に考察してこの「ノート」を閉じたい。

近代資本主義社會が產んだ現代社會經濟機構のメカニズムはその巨大裝置のなかに人間を否應なく（まさに義務づける）卷き込んで機能化し、反射と循環の流れのなかに人間の自己意識、自己價値感情を喪失せしめ、企業、工場、官廳等總じて社會形成體構成の目的、仕方についてのエトスを剝奪する。かかる特質の最も端的な時代的表現は東西世界の對立でもあろうが、右の狀況のもつ悲劇性はその巨大裝置自體がその內部に新しい社會形成の生命力を創出する力を有しない——現代產業社會のもつこの問題性を H. Freyer は「二次的（sekundär）組織」のそれとして規定している——という事情により倍加される。社會學的「人格」概念の强い主張は、かつてマックス・ウェーバーが洞察力あるまなざしでみつめていたような——すぐさま脫ぎすてらるべきこの世の假の薄衣が鐵の衣として重々しく吾々に蔽いかぶさつている——問題狀況に直面しての人間の生命性への、社會形成力たるエトスへの吾々人間の「內なる叫び」ではあるまいか。

ここに吾々は現代ドイツ社會學の思考狀況を總括し第一に「人間中心主義的志向」、第二に「新理想主義的性向」という二つの言葉を裏扉に彫りつけてこの「ノート」を閉じる。

附記　（このノートの作成には慶應義塾學事振興資金の援助を受けた。）

參照論文

L. v. Wiese, Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie. Schmollers Jahrb. 69 Jahrg. 1949, 2 Heft S. 101—107.

K. G. Specht, Der Zehnte Deutsche Soziologentag in Deltmold. Schmollers Jahrb. 69 Jahrg. 1949, 1 Halbb. S. 737—742.

K. G. Specht, Die Anthoropologisch-soziologrische Konferenz. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950, 1 Heft S. 87—98.

K. G. Specht, Der 12. Deutsche Soziologentag und die 3. Anthoropologische-soziologische Konferenz. Schmollers Jahrb. 75 Jahrg. 1955, 1 Heft, S. 87—92.

E. Tuchtfeldt, Zur heutigen Problemstellung der Wissenssoziologie, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 107 Bd. 1951, S. 723—731.

H. Winkmann, Die Bedeutung der systematischen Soziologie für die Sozialwissenschaften. in; Soziologischen Forschung in unserer Zeit. L. v. Wiese zum 75 Geburtstage 1951, S. 15—24.

H. Hofmann, Die Beziehungslehre als sozialwissenschaftliche Forschungmethode. ebenda S. 25—40.

R. Wanstrat, Die hermeneutische Methode in der soziologischen Forschung. Schmollers Jahrb. 69 Jahrg. 2 Halbb. 1949, S. 641—659.

R. Wanstrat, Die sozialwissenschaftliche Verstehen bei Dilthey und M. Weber. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950, 1 Halbb. S. 19—44.

T. Geiger, Kritische Bemerkung zum Begriff der Ideo-

logie. in; Gegenwartsproblem der Soziologie, A. Vierkandt zum 80. Geburtstag 1949, S. 140—155.

M. Horkheimer, Ideologie und Wertbeziehung. in; Soziologischen Forschung in unserer Zeit. S. 220—227.

H. Sultan, Gesellschaftliche Strukturwandlungen und nationalökonomische Theorie. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 109 Bd. 1953, S. 602—614.

G. Eisermann, Bemerkung über das Verhältnis zwischen ökonomische Theorie und sozio-ökonomische Struktur. Zeitschrift für die gesamte Staatwissenschaft. 110 Bd. S. 458—471.

W. Ziegenfuß, Wirtschaftssoziologie und Wirtschaftstheorien. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950, 1 Halbb. S. 1—18.

H. Freyer, Der Mensch und die gesellschaftliche Ordnung der Gegenwart. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. Bd. 110, 1954, S. 1—12.

E. Rohthacker, Bausteine zur Kultursoziologie. in; Gegenwartsproblem der Soziologie, 1949, S. 79—101.

尙戰後のしばらくの時期の社會科學關係文獻目錄としては左記のものが便利である。

Bibliographie der Sozialwissenschaften. herausgegeben von R. Schaeder in; Jahrbuch für Sozialwissenschaft, Bd. 1/1 1950.

宗門改帳より壬申戸籍へ（二）

——維新期の人口調査とその一例——

速水　融

一、維新期における人口調査
二、和歌山藩における人口調査（以上四十七卷十二號）
三、紀伊國牟婁郡尾鷲組概觀
四、幕末維新期尾鷲組人口統計資料の考察
五、結言

三、紀伊國牟婁郡尾鷲組概觀

紀伊國牟婁郡尾鷲組は、現在の三重縣尾鷲市内に含まれる管下十四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、德川時代には中井、南、林、堀北の四ヵ浦、及び野地村の五ヵ村から成り、この他早田、九木、行野、大曾根、天滿、水地、須賀利の七ヵ浦と、向井、矢濱、二ヵ村がある。浦方と村方の區別は既に述べた如く(註)、漁業を許されるか否かによつて居り、從つて實際に漁村であるか農村であるかの區別とはならない。しかし、尾鷲組十四ヵ村の内十一ヵ村が浦方であつた事は、この地の位置するところを物語つている。

（註）拙稿「近世における漁村の移住と漁場の利用、支配の關係について」（三田學會雜誌四十六卷七號所收）參照。

さて本稿において取り上げんとするのは、以上の尾鷲組すべてではない。中心となる尾鷲五ヵ村は、第一表に示す如く相當大なる人口を有して居り、その資料は厖大であり、且つ缺損が甚しいからである。これらは前後の關係から、綿密に行えば復原も可能であるがこれらは後日に譲ることとし、本稿ではその周邊の、早田、行野、大曾根の三ヵ浦と、向井村の四ヵ村の資料につき考察を行いたい。しかし、ここで一應全村の戸口數を表示して置こう。明治三年の數字は、同年四月に行われた宗門改帳系統に屬する最後の戸口調査によるものであり、五年の數字は同年の壬申戸籍による。前者は各村の宗門帳末尾の記載から、後者は戸長における總計「度會縣管轄第七區小三區戸籍總計」から求めた。

さてこの四ヵ村の樣子を最も手近かに知り得るのは、明治二年の尾鷲組村々明細帳(註)によるのが簡便であろう。適宜拔書きをしてみれば次の如くである。